

赤穂市文化財調査報告書3

# 周世入相遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月

赤穂市教育委員会  
赤穂埋蔵文化財調査会

## 正 誤 表

ペー ジ ・ 行	誤	正
1ページ・7行	図版2	図版1
3ページ・10行	周世宮裏群集墳	周世宮裏山群集墳
6ページ・12行	黄褐色土層	黄褐色土層
7ページ・12行	同じ	ほぼ同じ
7ページ・22行	礫層	礫混り
8ページ・19行	刷毛調整成	刷毛調整
12ページ・第1図	第1トレンチ断面	第1トレンチ断面図
12ページ・第1図	第1トレンチ平面	第1トレンチ平面図
14ページ・第3図 第5トレンチ断面図	④淡黒褐色土層	④濃黒褐色土層

赤穂市文化財調査報告書3

# 周世人相遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月

赤穂市教育委員会  
赤穂埋蔵文化財調査会

# 序

私たちの赤穂市は、兵庫県の西南端に位置し古代の人たちが残した遺跡の多いところにあります。

この周世入相遺跡は、戦後瓦粘土採集時に発見され、その時の遺物包含層から相当の集落が発達していたのではないかと推考されてきました。従って学術的な調査をするべきであると識者の中では指摘され要望されていました。今回この予定地に農業基盤整備事業及び県道バイパス建設事業が計画され、兵庫県教育委員会の指導を得て、赤穂市教育委員会が発掘調査を実施したものです。

この小冊子は、発掘調査の概要をまとめたものであり、今後、こうした遺跡の保存と活用にいささかでも参考となれば幸甚です。

最後に、調査にご尽力を頂いた赤穂埋蔵文化財調査会長である松岡秀夫先生をはじめとする各位のご労苦に感謝し、また調査にご協力を頂いた周世土地改良区理事長大谷重夫氏及び土地所有者の方々に厚くお礼申しあげる次第であります。

昭和59年3月31日

赤穂市教育委員会

教育長 木山正規

## 例　　言

1. 本報告書は、赤穂市教育委員会が実施した周世入相遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、赤穂埋蔵文化財調査会が赤穂市教育委員会の委託を受けて実施したものである。

調査員 松岡秀夫（会長、財団法人有年考古館長）  
河原隆彦（東洋大学附属姫路高等学校教諭）  
松岡秀樹（兵庫県播磨高等学校教諭）  
谷崎良晴（神戸野田高等学校教諭）  
石塚太喜三（姫路市立朝日中学校教諭）  
竹本敬市（明石市立望海中学校教諭）  
松本保（赤穂市立赤穂東中学校教諭）  
谷中進（赤穂市立坂越中学校教諭）  
福田昭宏  
前田靖幸  
河部元一

担当事務局 赤穂市教育委員会 社会教育課

3. 調査期間は、昭和59年1月4日から昭和59年1月18日まで実施し、この調査に要した経費は赤穂市が負担した。
4. 遺物番号の表示は、本文・図面・図版を共通する通し番号とした。
5. 本報告書は、調査会が充分に討議したものを、河原・谷崎が執筆・構成した。調査及び遺物の写真撮影は、主に河原が行い、遺構・遺物の実測については、調査員の責任においてそれぞれを分担した。
6. 本報告書の編集は、赤穂埋蔵文化財調査会が行った。
7. 整理後の出土遺物は、赤穂市教育委員会に保管している。

## 本文目次

序	
例言	
第1章 遺跡の環境	1
第2章 発掘にいたる経過	4
第3章 調査の目的	4
第4章 調査の方法	5
第5章 調査の結果	6
第6章 遺物について	8
第7章 まとめ	11
第8章 今後の課題	11
あとがき	

## 挿図目次

第1図 位置図、周辺遺跡分布図	1
第2図 採集遺物（磨製石斧）	3
第3図 採集遺物（弥生土器）	3
第4図 トレンチ設定図	5

## 図面目次

第1図	第1トレンチ断面図	12
	第1トレンチ平面図	
第2図	第2トレンチ断面図	13
	第3トレンチ断面図	
	第4トレンチ断面図	
第3図	第5トレンチ断面図	14
	第6トレンチ断面図	
	第7トレンチ断面図	
第4図	第8トレンチ断面図	15
	第9トレンチ断面図	
	第10トレンチ断面図	
第5図	第11トレンチ断面図	16
	第12トレンチ断面図	
	第13トレンチ断面図	
第6図	第14トレンチ断面図	17
	第15トレンチ断面図	
	第16トレンチ断面図	
第7図	第17トレンチ断面図	18
	第18トレンチ断面図	
	第19トレンチ断面図	
第8図	第6トレンチ遺物出土状況	19
第9図	第8トレンチ遺物出土状況	20
第10図	第6トレンチ出土遺物(1)	21
第11図	第6トレンチ出土遺物(2)	22
第12図	第6トレンチ出土遺物(3)	23
第13図	第6トレンチ出土遺物(4)	24
第14図	第6トレンチ出土遺物(5)	25
第15図	第6トレンチ出土遺物(6)	26
第16図	第8トレンチ出土遺物	26

## 図版目次

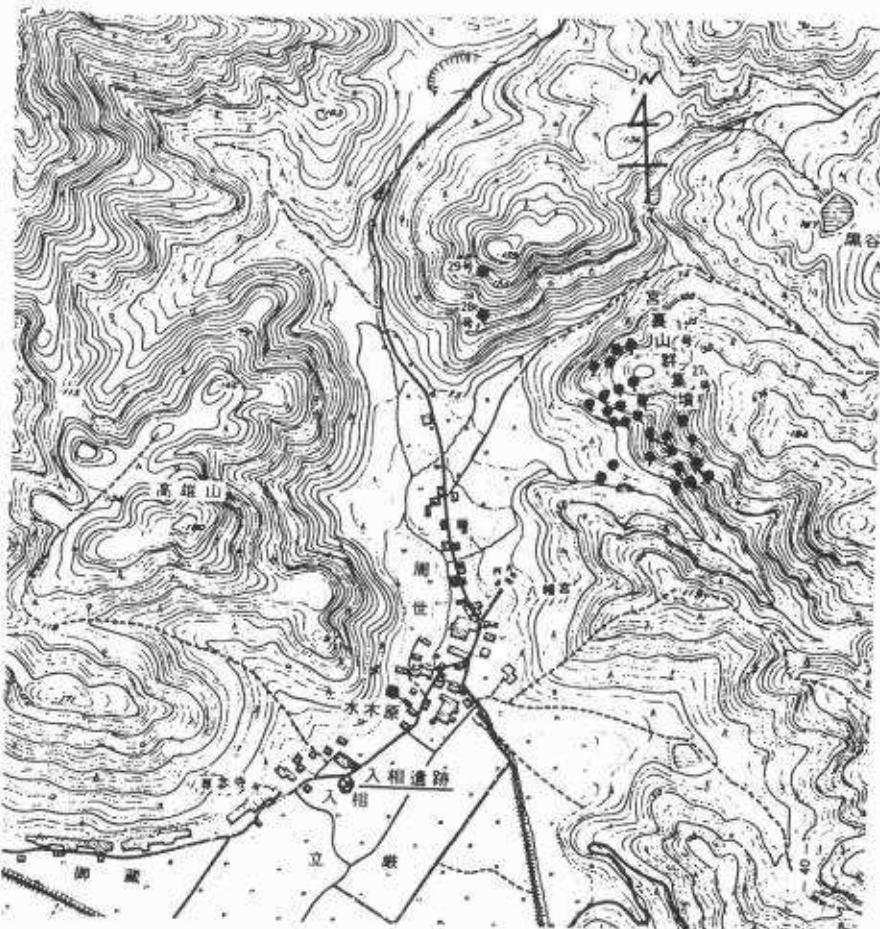
図版 1	遺跡遠景	27
	採集遺物（磨製石斧）	
	採集遺物（弥生土器）	
図版 2	遺物出土状況	28
	発掘風景	
図版 3	第 6 トレンチ土器群出土状況	29
	第 8 トレンチ下駄出土状況	
図版 4	第 1 トレンチ全景・第 1 トレンチ断面	30
	第 2 トレンチ断面・第 3 トレンチ断面	
	第 4 トレンチ断面・第 7 トレンチ断面	
	第 8 トレンチ断面・第 15 トレンチ断面	
図版 5	出土遺物 1～8	31
図版 6	出土遺物 9～16	32
図版 7	出土遺物 17～18	33

# 第1章 遺跡の環境

周世入相遺跡は、兵庫県赤穂市高雄字入相・當田の地籍に含まれる(第1図)。

本遺跡は、現在の海岸線より内陸部へ千種川を遡ること約7.5kmに位置する。上流から南下してきた千種川は、この地立巖の、狭い間隔を縫うがごとく流れて、大きく流れを東向に変え、周世放亀の岩に激突して、再び流れを南に変える。

本遺跡は、その水裏にあたる左岸に位置し、標高180mの高雄山の東側、海拔8.0m～8.5mの水田にある(図版2)。



第1図 周世入相遺跡位置図・周辺遺跡分布図

この地は、山陽新幹線が建設される際、入念なボーリング調査が行われていて、門前から周世の入相間に13本の地質柱状断面図が作成されている。

それによると、古千種川礫層（シルト質砂礫層）は東西の山沿いを除いて明確であり、その頂点を結ぶと中央部で凹み、両側で高くなっている。中央の3本の柱状図では古千種川礫層の上部は地表まで類似の砂礫が10mばかり堆積している。それに対して両側のものには古千種川礫層の上に3m～5mの礫層があり、その上部には3m～4mの砂が堆積している。

両側の地表付近の砂層と、中央部の厚い砂礫層を除去した地形は、河岸段丘地形と呼称されて、加古川・市川の中・上流でも見られるといわれており、これは以前に川底であった部分とされている「赤穂市史第1巻地質編」。

地形に大きな変化をもたらす要因には、豪雨、洪水または地震というような現象によるものが多い。前述のように千種川は山と山の狭い間隔を右に左にその流れを変え土砂や礫を堆積させてきた。

これらの土砂や礫の堆積は、谷間に小規模な沖積平野を形成するに至る。

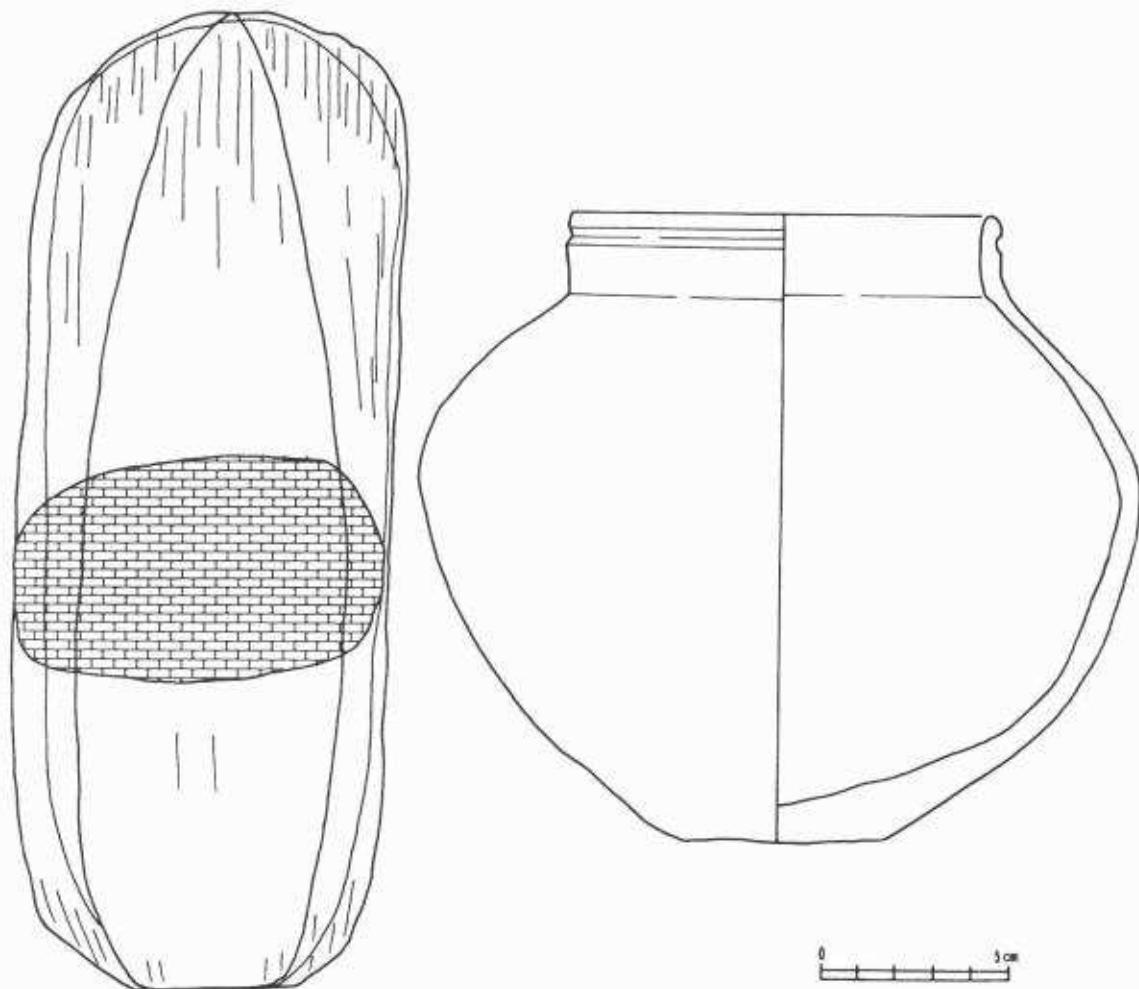
千種川や木原川が現在のように護岸整備されるまでには、この周世の地も何回となく豪雨、洪水に見舞われ、田畠・家屋の流失があったものと思われ、「赤穂郡志」・「赤穂市史第1巻」によれば、5年に2回の割りで洪水に見舞われたとしている。

このように、豪雨は不完全な堤防を決壊して洪水となり、田地・家屋を襲う。また、河川はその流れを変え、ある地点においては湖沼に似た地形を残し、これが次の豪雨や洪水で河川の一部になったりする。

この周世入相地区に於いても、千種川と木原川がこのような状況を繰り返すことによって沖積平野を形成するに至ったものと考えられ、今回の発掘調査に於いても各々のトレンチで、第4層以下にかなり厚いシルト層が検出されていることによって、前述の土地形成の過程がある程度解明されたものと思われる。

次に歴史的観点から見てみると、本遺跡は、第二次大戦後、瓦製造のための粘土採取時に地元の松本保氏（現、赤穂市立赤穂東中学校教頭）によって発見されたもので、その時に採取された遺物に磨製石斧・弥生土器がある（第2・3図、図版1）。

その採集時の状況を松本氏は「耕作土直下の包含層からは平安時代のものと思われる須恵器・土釜・布目瓦などが出土し、その下1mの粘土層からは古墳時代の土器（土師器か？）、さらに深さ2m前後から弥生土器・石斧・石鎌・環状石斧を探集した」



第2図・第3図採集遺物（磨製石斧・弥生土器）

ということである。

これら採集された弥生土器は、その大多数が後期に属するものである。土師器も、僅かに中期後半のものを含んでいる。

すなわち、この地には弥生中期後半期には人々が農耕の適地として居住を始めたものと考えられる。

しかも前述のように、千種川、木原川の決壊などの被害をうけながら、人々はこの地を見捨てることなく自然現象と戦いながら、日々と農耕に従事して現在に至ったものと思われる。

次に記すべき項は、この周世入相遺跡から北へ1,000mの黒谷山の南斜面・東斜面の標高30～60mにかけて周世宮裏群集墳と呼ばれる古墳28基がある。

これらはいずれも横穴式石室をもつ円墳で、規模もそれ程大差はない。これらの古墳は全て盗掘されており、地元の人々が採集した副葬品らしい遺物の中には金メッキを施した金環・台付長首壺等多数あり、これらの遺物及び古墳の規模から察して7世紀初～中期の古墳時代後期の構築と思われる「赤穂市史第1巻考古編」。

## 第2章 発掘にいたる経過

昭和56年の初頭に、赤穂市より農業基盤整備事業計画が示された。この計画地は、あらゆる遺跡台帳に登載された周知の遺跡であり、昭和58年5月に弥生土器片、土師片、布目瓦片、須恵器片等を多量に採集した。その土器の散布状況、ボーリング等の調査を実施した結果、この地域に於ける調査方法として、先ず試掘調査の必要があるという結論に至った。

また、昭和58年度秋には、農業基盤整備事業の主幹農道が県道高雄～有年横尾線のバイパス建設へと具体的に計画化されてきたのである。

現在の県道高雄～有年横尾線は周世集落を蛇行し、しかも普通自動車がやっと通行できる道路幅しか有しておらず、二車線の道路が必要となり、バイパス建設が計画されたものである。

今回の発掘調査は、バイパス建設予定地内の遺跡、遺構の事前確認調査である。

## 第3章 調査の目的

調査実施の目的は、農業基盤整備事業予定地内・県道高雄～有年横尾線バイパス建設予定地内における遺構、遺物の有無、さらにはその正確な遺跡の範囲、年代の確認を判定することにある。重要な遺物、遺構が検出された時には今回は現状のまま埋め戻し、別の機関の審議に委ねることにした。

申すまでもなく、今回の発掘調査の第1の目的は、周世入相遺跡は周知の遺跡でありその遺跡の内容の実態を把握することである。

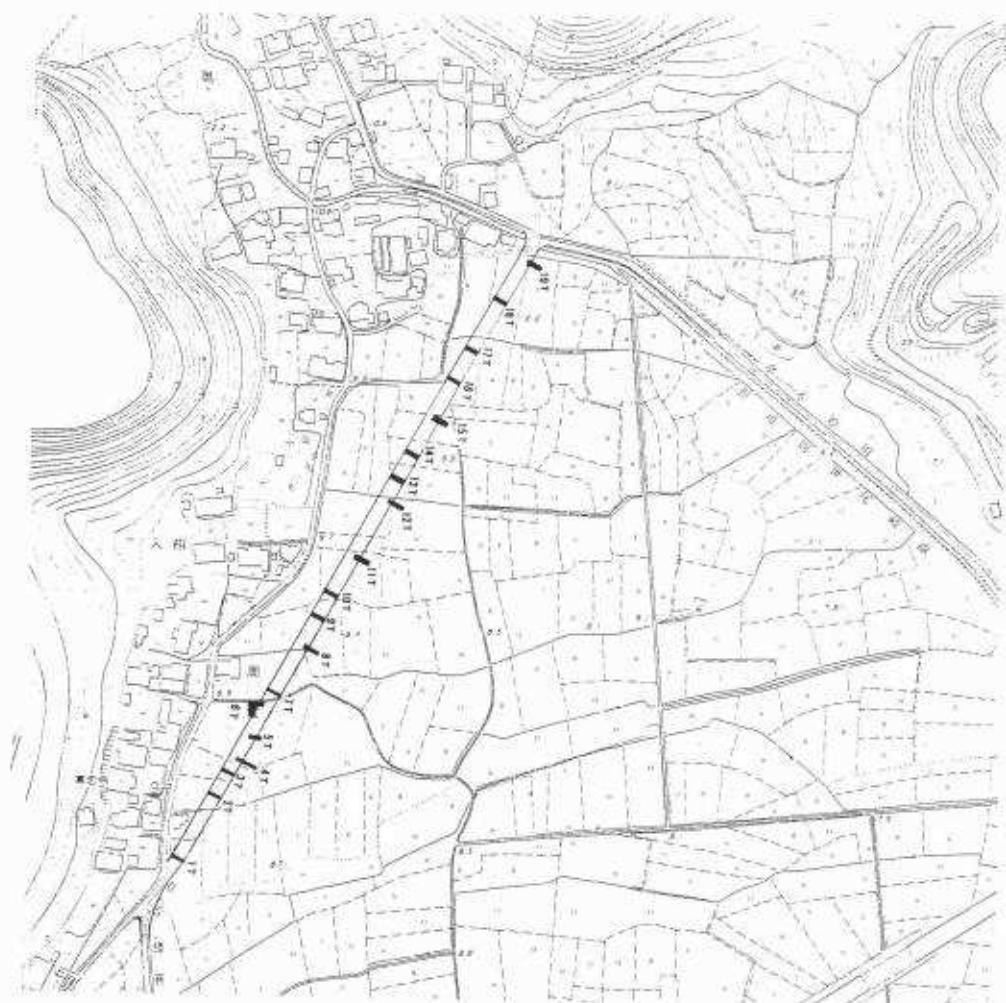
次に県道高雄～有年横尾線バイパス建設工事に先だつ事前発掘調査であり、遺構内

における遺物包含層の範囲を把握することが第2の目的である。

以上の点を踏まえて、時間の許容する限り慎重に調査した。

## 第4章 調査の方法

県道高雄～有年横尾線バイパス建設予定地（道路幅10m、全長480m）に20m間



第4図 トレンチ設定図

隔でもって 2m × 8m のトレンチ 24 本を設定した。

調査については来年度も水稻作付をするため、地元土地所有者との話し合いで、現在の水路・畦畔等を壊すことができないので、必ずしも当初設定した通りにはいかなかった。しかし、その場合には隣接した適地を選んで調査した。

当初 24ヶ所のトレンチ発掘計画であったが、前述のように土地所有者との問題、調査の進行状況（包含層・遺物・遺構の検出）等を勘案して、19ヶ所のトレンチ発掘を実施した。トレンチは南から順に第 1 トレンチ～第 19 トレンチと呼称した。

## 第 5 章 調 査 の 結 果

発掘調査の結果、明らかになった層位・遺物・遺構の検出状況をトレンチごとに列記して報告する。

### 第 1 トレンチ（第 1 図、図版 4）

第 1 層は耕作土層、第 2 層は床土でなく、黄褐色土層、第 3 層は濃黄褐色土層、第 4 層は淡い茶褐色土層からなる。第 5 層で南北に平行して奔る深さ 10cm～12cm・幅 60cm の 2 本の溝跡と柱穴と思われるピット 2 箇所を検出。遺物は時期判定不可能な程磨耗の著しい弥生土器 2 片・須恵器 3 片を同層にて検出した。

### 第 2～第 4 トレンチ（第 2 図、図版 4）

第 1 層、第 2 層、第 3 層までは大体において第 1 トレンチの土層と同じである。この第 3 層中は、豆粒大の磨耗の著しい弥生土器を小数含む。第 4 層で淡黒褐色土層となり、遺物は包含されていない。

第 4 層、第 5 層と下層への掘り下げを考えないでもなかつたが、今回はこの層で止めた。

### 第 5 トレンチ（第 3 図）

第 4 層までは前記のトレンチと同じ土層である。

このトレンチの東端において第 5 層・第 6 層の土層検出を試みた。これらの層は淡

青色の粘土層より成り、湧水も激しくなり止めた。この層より遺物・遺構の検出はなかった。

#### 第6トレンチ（第3・8図、図版3）

第4層の下部で弥生土器群を検出。トレンチを拡張して遺構の確認につとめた。

検出された土器群は、一区画に集中しており、弥生土器、土師器がほとんどで、壺・高杯の片である。しかし、限られた範囲の発掘であって、遺構としての全容を捉ることはできなかった。

#### 第7トレンチ（第3図、図版4）

第4層までは前述のトレンチの土層と同じ。この第4層で弥生土器片を検出。また同層で炉の跡と思われる焼けた土・石及び炭を検出した。

#### 第8トレンチ（第4・9図、図版3・4）

第4層までは前述のトレンチの土層と同じ。第4層で弥生土器片を検出。第4層より断面に落ち込みらしい土層を検出。兵庫県教育委員会大平茂技師の指示により第6層まで掘り下げた。

第4層、第5層はいずれも淡青色の粘土層から成り、第5層の上面、地表より120cmの地点で下駄を検出。同層で須恵器片・土師器片を検出。しかし、この層は生活層とは考え難く、これらの遺物は豪雨、洪水等の際の流入物と考えられる。

#### 第9～第19トレンチ（第4・5・6・7図、図版4）

これらのトレンチはいずれも第1層の耕作土は厚く、第2層の床土はない。第3層では麦栽培のための暗渠排水溝を検出。瓦礫自然石の暗渠排水溝や、松材を用いた排水溝が密に設置されていて、土層もその工事の際に攪乱されたものと思われる。

第4層以下は礫層となる。

## 第6章 遺物について

周世入相遺跡から出土した遺物の大部分は、第6トレンチで検出したものである。その他のトレンチで検出された遺物は、いずれも数少なく小片で、写真・図版の対象にならなかった。

以下に列記する遺物は、全て第6トレンチにおいて検出された遺物の中より、写真・実測可能なものを選んで列挙したものである。

### 土器1（第10図、図版5）

土師器の壺の口縁部である。内面・外面とも淡い茶色を示し、胎土は1mm粒の砂粒を含む。焼成は良い。

### 土器2（第10図、図版5）

土師器の壺の底部である。表面は横なので、あげ底である。成形時の指圧痕があり、焼成は良好で内・外とも淡い赤色を示す。胎土は粗く、2～3mm粒の砂粒を多く含む。

### 土器3（第10図、図版5）

弥生後期の特色を有する甕の底部である。地下水等の湧水で洗われた現象であろうか外面は磨耗が著しい。焼成は良好。外面は淡茶褐色、内面は灰黒色を示す。胎土は密にして、2～3mm粒の砂粒を含む。

### 土器4（第11図、図版5）

弥生後期の壺の口縁部である。口径は14.2cmを測る。肩部は密な刷毛調整成横なで仕上げを施した痕と箆で押さえつけた様な痕がある。焼成は良好。内面・外面とも淡茶褐色を呈す。

### 土器5（第11図、図版5）

口径18.4cmを測る土師器の壺である。口縁部の内外面はこまかい横なでで、ていねいに成形されている。この状況は外面頸部にも同様の痕跡がある。これに比して、胴部内面の仕上げは粗い横なでで成形されている。胎土は1～2mm粒の砂粒を含む。焼成は良好であり、赤褐色を示す。

### 土器6（第11図、図版5）

弥生後期の甕の底部である。器壁がやや薄く、焼成も良好である。内・外面ともに淡茶褐色を示し、胎土は密である。

### 土器7（第12図、図版5）

弥生後期の壺の底部で、底径4.5cmを測る。底部は叩き成形技法の痕跡が顕著に認められる。

### 土器8（第12図、図版5）

弥生後期の壺の底部で、底径は4.5cmを測る。底部は叩き成形技法の痕跡を残している。器壁が厚く、胎土はやや密であり、赤褐色を示す。

### 土器9（第12図、図版6）

土師器の壺である。口縁部は逆L字形で内側に2cm入りこむ線を有し、その線は直角に内面に突出している。口線の上部周辺は箠で押した模様を施しており、外面には全面に刷毛目調整で叩き目を消している。また、模様を施した直下に2箇所穿孔されており、繊維等を通して取手を付けたものと考える。

### 土器10（第13図、図版6）

弥生後期の壺の底部である。外面は箠で斜線が施され黒褐色、内面の底部には指圧痕が残され淡赤褐色を呈す。胎土は密にして1～2mm粒の砂粒を含む。

### 土器11（第13図、図版6）

口径16.2cmを測る土師器壺の口縁部である。磨耗が著しいのは地下水等で長期間、

洗われた影響によるものと思われる。頸部で口縁部と体部の接続部が大きい「く」字状を呈しているので、様式から察して庄内式に属するものと思われる。仕上げは横なでで仕上げを施す。

#### 土器 12 (第13図、図版 6)

口径11.7cmを測る弥生後期の壺の口縁部である。内面は灰褐色を示し、刷毛で横なでに丁寧に成形されている。外面は灰褐色部と黒褐色部とに分れており、黒褐色部分は煮沸の際に生じた煤跡とも思われる。

外壁には一面に叩き成形した痕跡が顕著に残っており、口縁部も粘土紐を結合したものでなく、体部成形時に粘土を連続的に叩き伸ばし、口縁部を紋り、仕上げ成形したものと思われる。

#### 土器 13 (第14図、図版 6)

土師器の壺の底部である。内面は淡茶褐色、外面は黒褐色、茶褐色とに分れる。焼成は良好。胎土は密なるも1mm粒の砂粒を含む。

#### 土器 14 (第14図、図版 6)

土師器の壺の胴部である。内部は淡茶褐色、外面は茶褐色、黒褐色とに分れる。底部が黒褐色を示しているのは、煮炊き等に利用されていたのではないかと思われる。焼成は良好。胎土は密で、外面は刷毛で丁寧に成形されている。

#### 土器 15 (第14図、図版 6)

高杯の脚部で、地下水に長期間洗われたためか、内・外面ともに乳白色を示している。焼成は良好。胎土は密であるが1mm～2mmの砂粒を含む。

#### 土器 16 (第14図、図版 6)

弥生土器の高杯の脚部である。焼成は良好で、胎土は密にして1mm～2mmの砂粒を含む。

#### 石器 17 (第15図、図版 7)

砥石の破片と思われる。研部は完全に磨耗しており長期間利用されていたものであろう。

#### 木器 18 (第16図、図版 7)

第8トレンチから出土した下駄である。耕作面から120cm下の第6層で検出されたものである。材質等は明らかでなく、先端が少し丸い長方形で、前鼻緒の孔が中心線上にある。歯は垂直に切られている様に見えるが、磨耗が激しいため断言できない。検出された下駄は1個体である。

## 第7章 まとめ

今回の第1次調査（試掘調査）の結果は、前述の通りであり、土層的には第1～第8と第9～第19のトレンチの地区に大きく2分される。しかも遺物等の検出はNo.1～第8トレンチまでの区间に限られており、第9～第19トレンチからは遺物の検出はない。

これらの点から推して、本遺跡の主要遺構は第1～第8トレンチ周辺に存在するものと考える。

## 第8章 今後の課題

以上、本遺跡における発掘調査の結果について述べてきた。

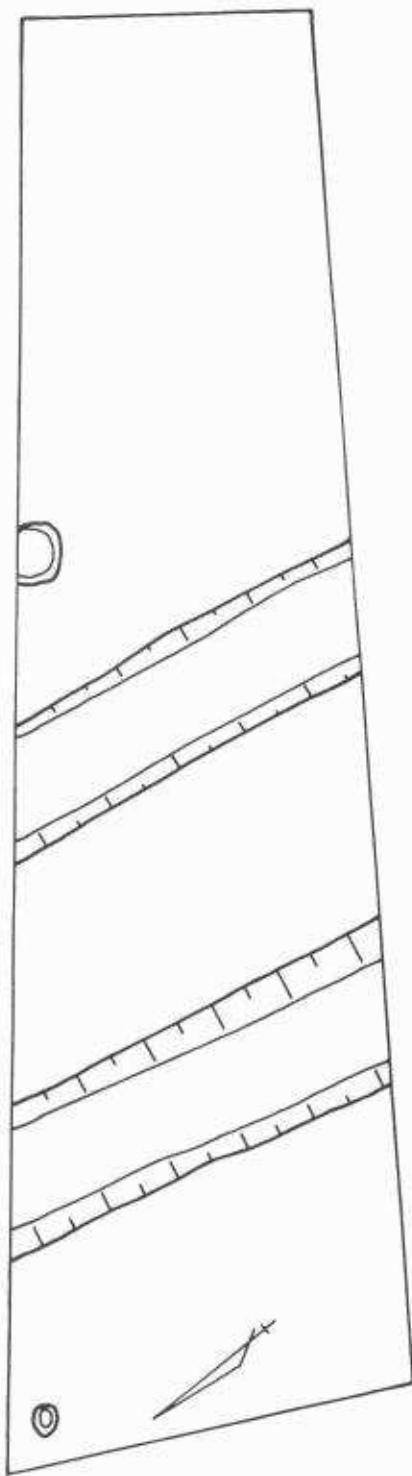
については、結論として、県道高雄～有年横尾線のバイパス建設事業・農業基盤整備事業の即時着工については検討を必要とする。

前述したように、瓦の粘土採取時の採集遺物、今回の第6トレンチで検出された弥生土器群、土師器群から考察して、建設予定地内の第1～第8トレンチ間は全面発掘が必要と思われる。

それによって、より正確な遺構・遺物の検出を行い、かかる後に着手されんことを提言したい。

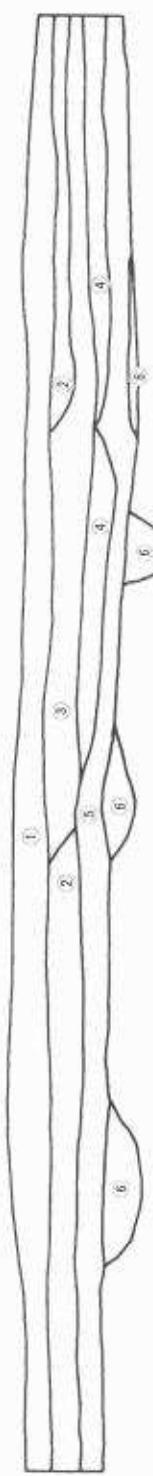
0 0.5 1m

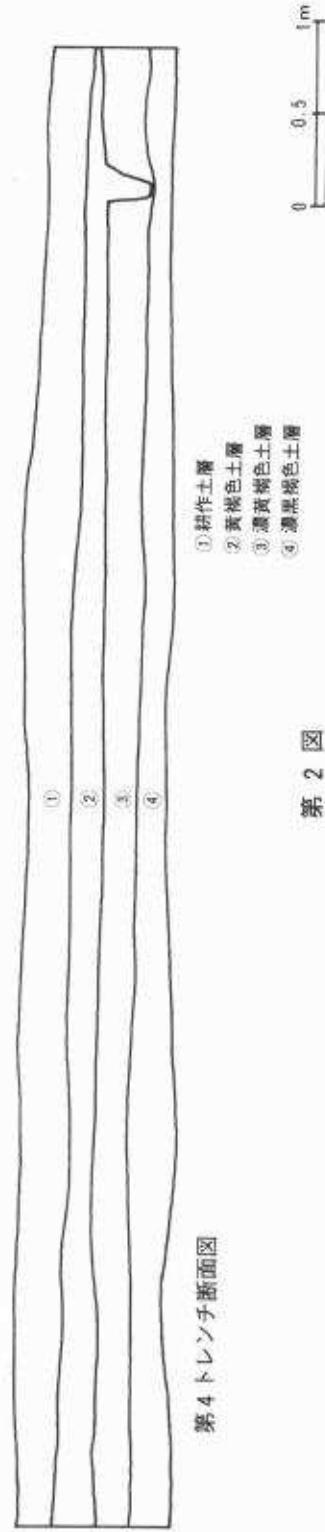
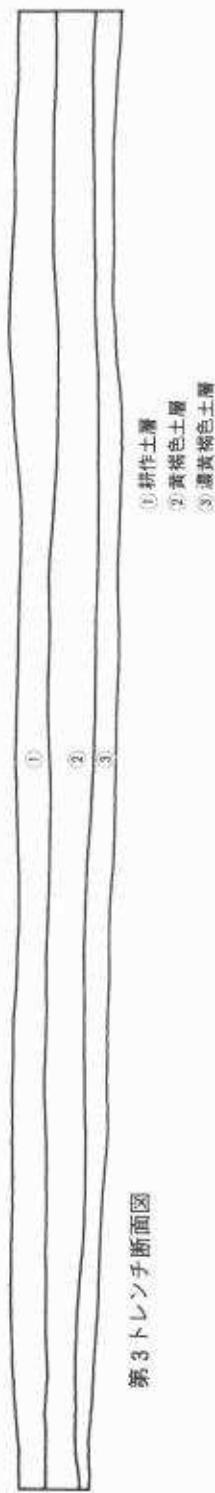
第1トレンチ平面  
第1トレンチ断面

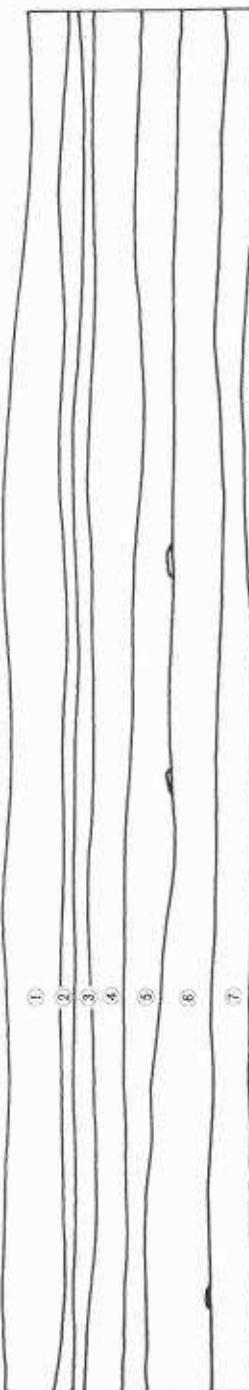
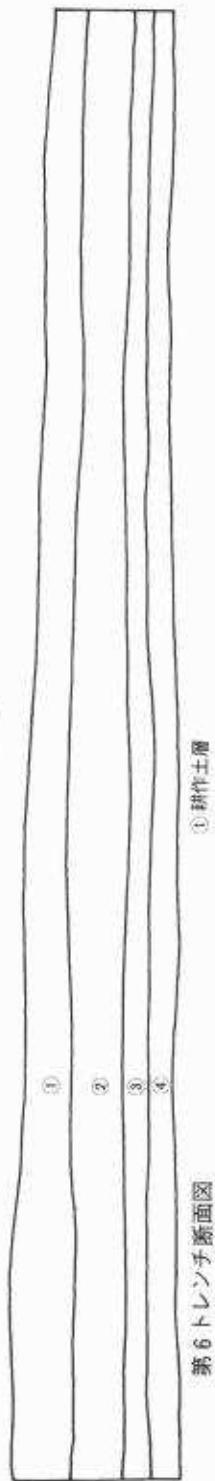
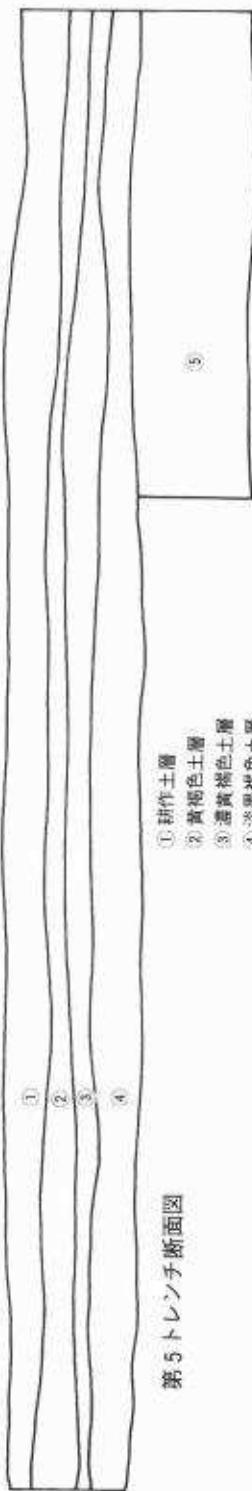


第1トレンチ断面

1. 耕作土層  
2. 黄褐色土層  
3. 深黄褐色土層  
4. 淡茶褐色土層  
5. 茶褐色土層  
6. 黑褐色土層

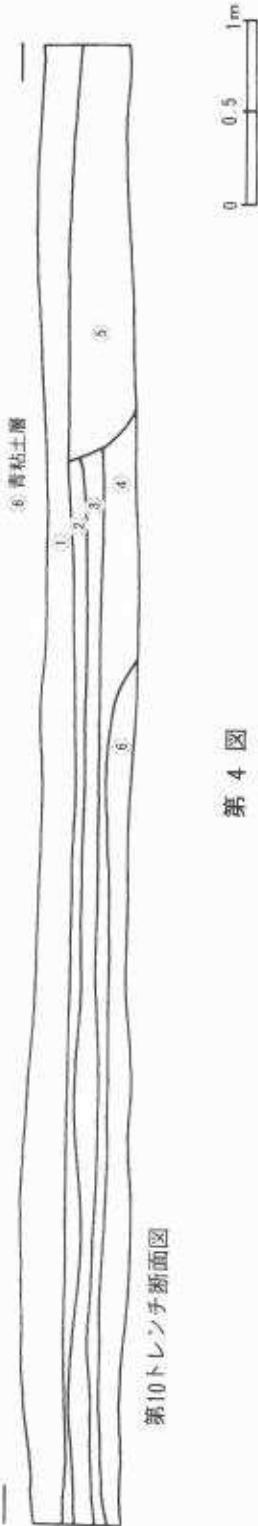
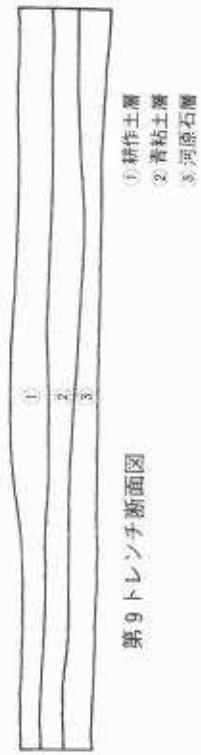
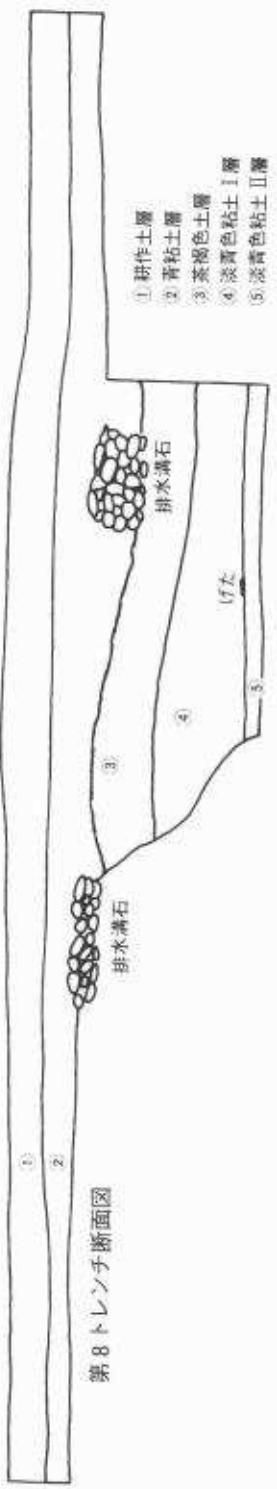




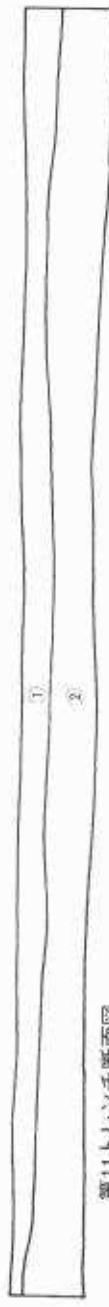


— 0.5 1m —

第3図

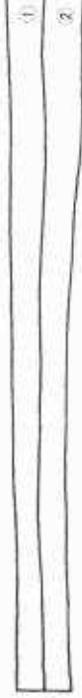


第4図



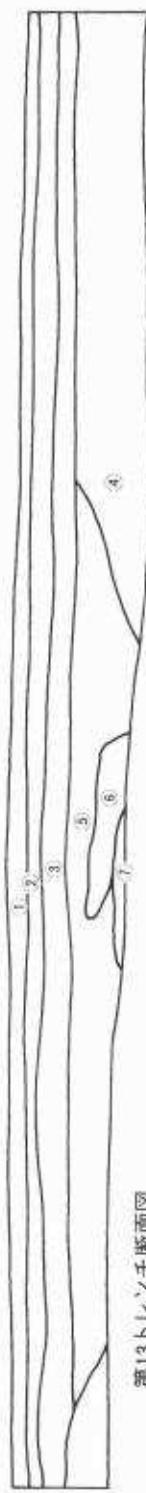
第11トレンチ断面図

1. 稲作土層
2. 青粘土層



第12トレンチ断面図

1. 稲作土層
2. 青粘土層
3. 反褐色土層
4. 茶褐色土層



第13トレンチ断面図

1. 稲作土Ⅰ層
2. 稲作土Ⅱ層
3. 青粘土Ⅰ層
4. 青粘土Ⅱ層
5. 灰色粘土Ⅰ層
6. 灰色粘土Ⅱ層
7. 茶褐色土層

第5図

0 0.5 1m



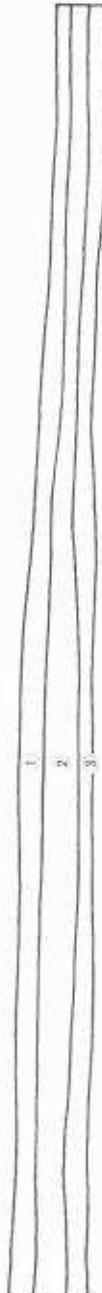
第14トレンチ断面図

1 排水溝  
2 淡黒色粘土層



第15トレンチ断面図

1 耕作土層  
2 茶褐色土Ⅰ層  
3 反褐色土層  
4 茶色光土層  
5 黄褐色土層  
6 茶褐色土Ⅱ層

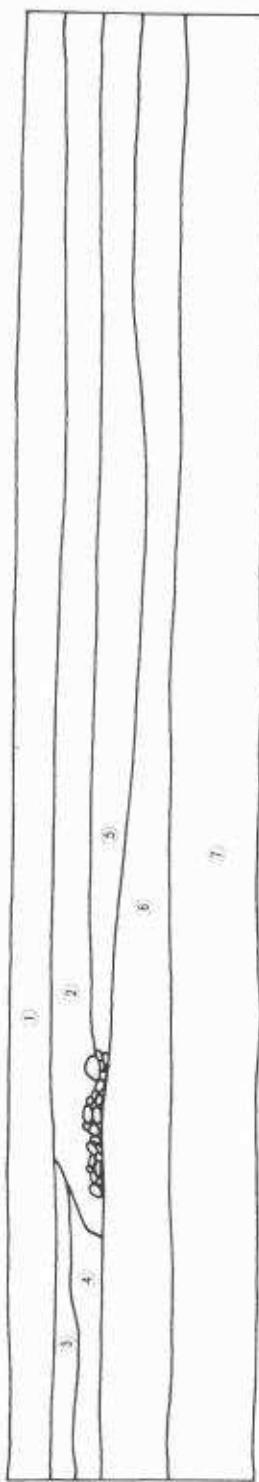


第16トレンチ断面図

1 耕作土層  
2 茶褐色土層  
3 反褐色土層

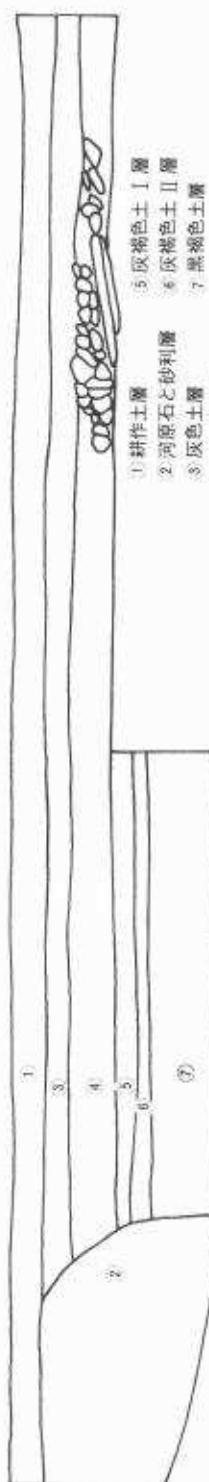
第6図

0 0.5 1m



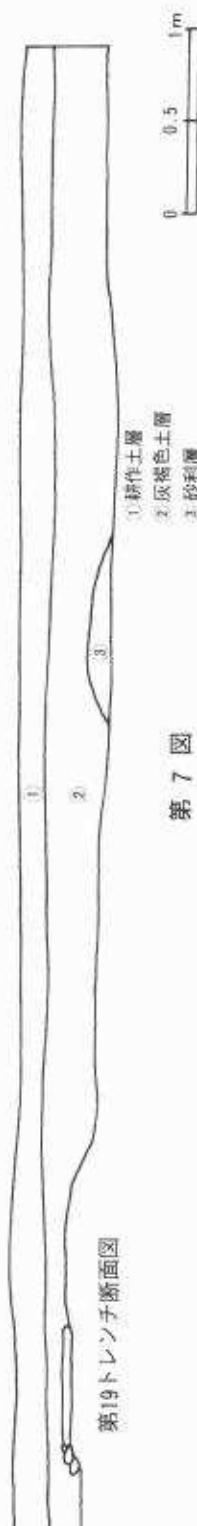
第17トレンチ断面図

- 1. 耕作土層
- 2. 灰色土層
- 3. 青粘土層
- 4. 黄褐色土層
- 5. 淡灰褐色土層



第18トレンチ断面図

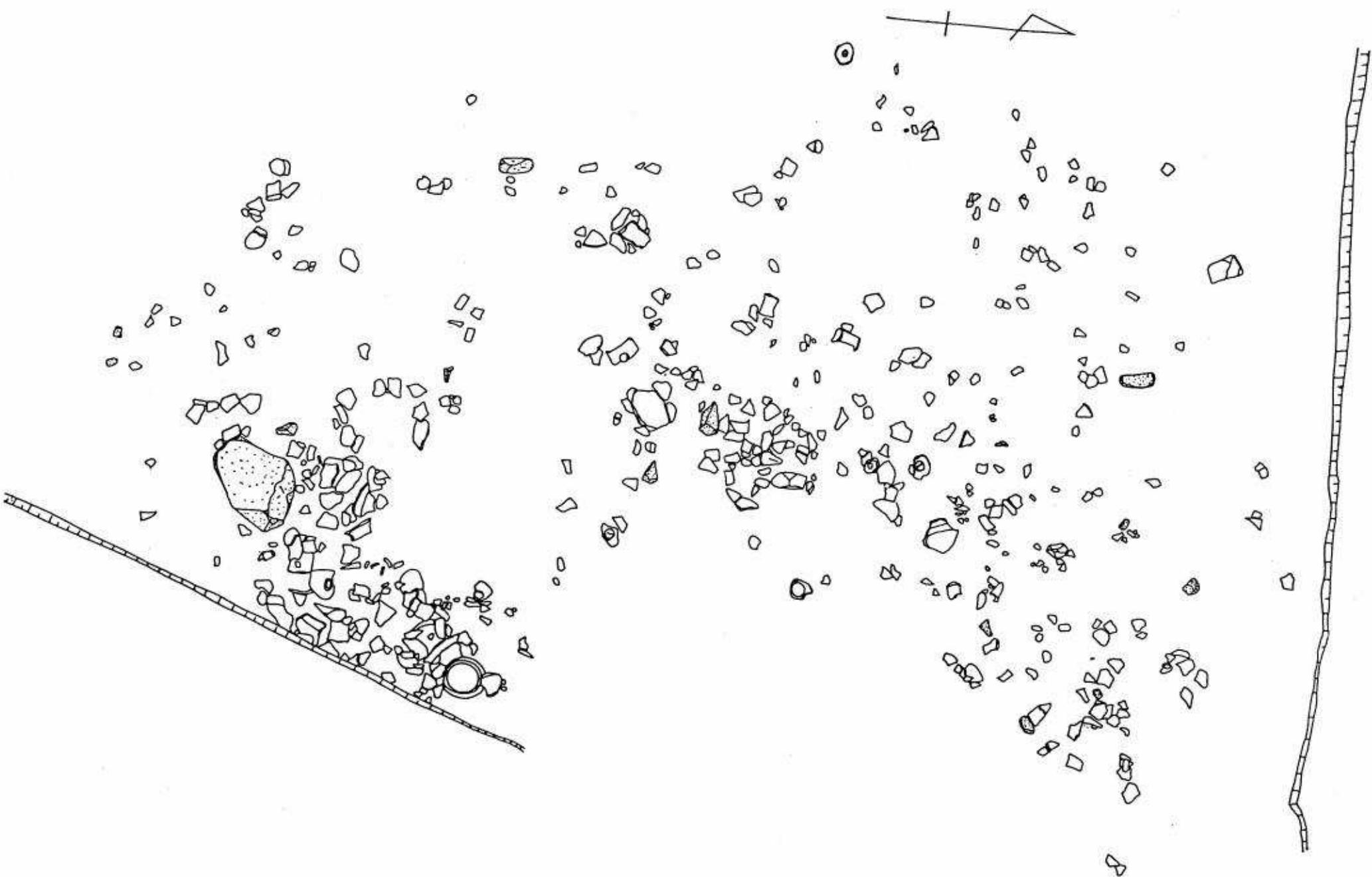
- 1. 耕作土層
- 2. 河原石と砂利層
- 3. 灰色土層
- 4. 黄褐色土層
- 5. 灰褐色土 1 層
- 6. 灰褐色土 2 層
- 7. 黑褐色土層



第19トレンチ断面図

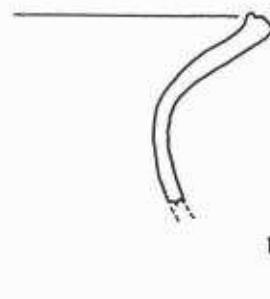
- 1. 耕作土層
- 2. 灰褐色土層
- 3. 砂利層

0 0.5 1m



第8図 第6トレンチ遺物出土状況

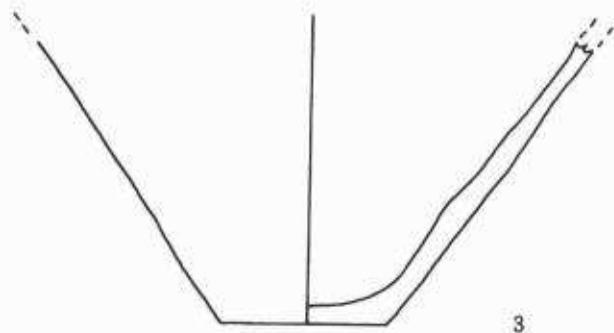
0 0.1 0.5 1 m



1



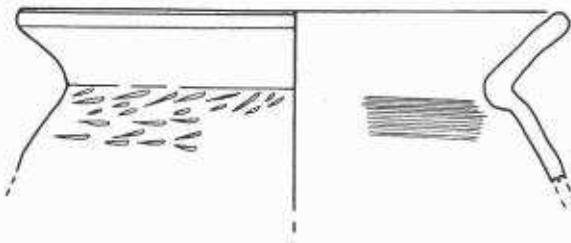
2



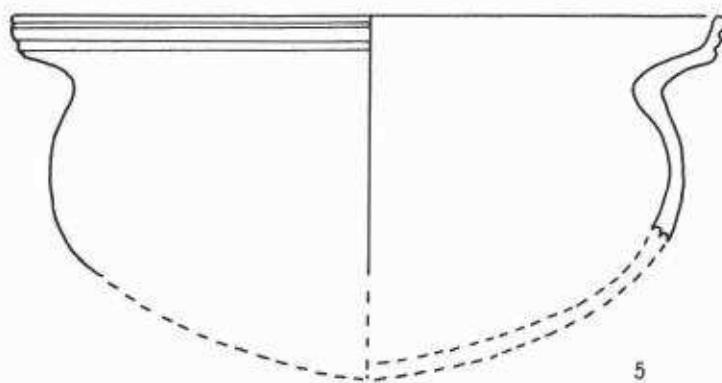
3

第 10 図 第 6 トレンチ出土遺物(1)

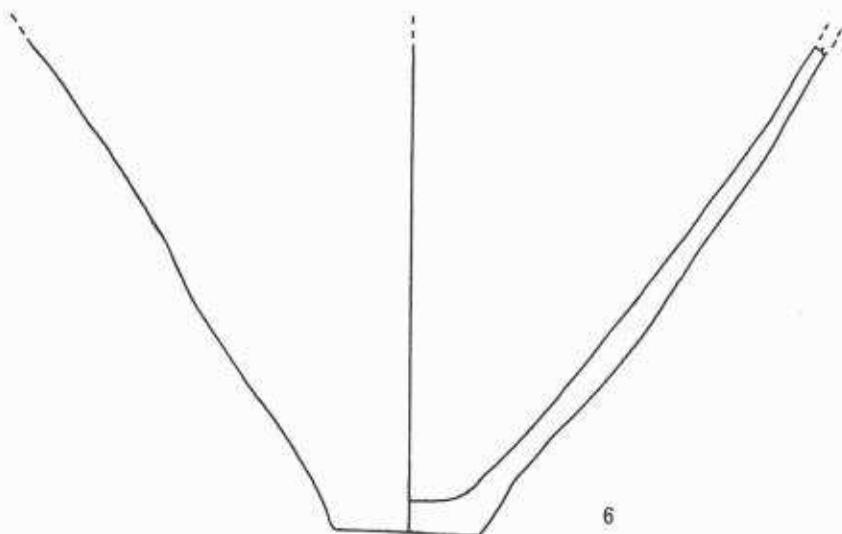




4



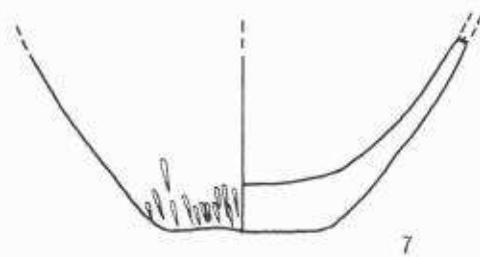
5



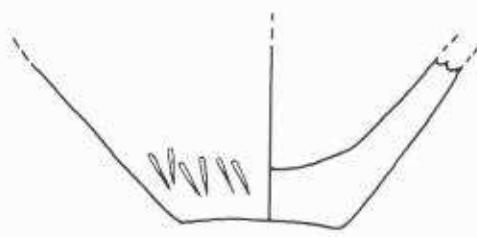
6

第 11 図 第 6 トレンチ出土遺物(2)

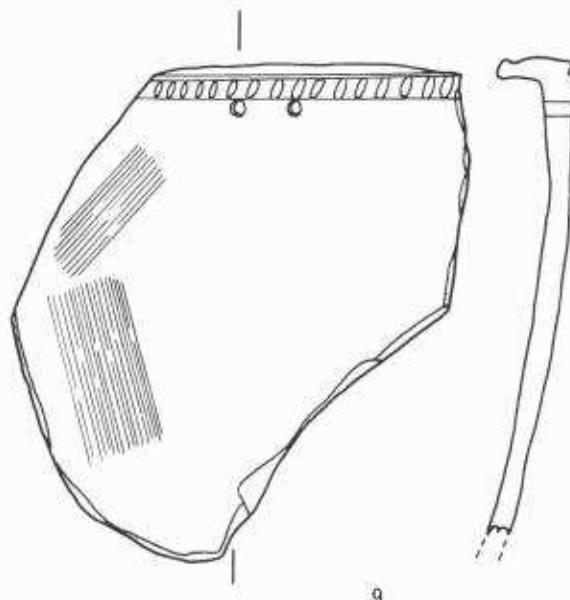




7



8



9

第 12 図 第 6 トレンチ出土遺物 (3)



赤穂市文化財調査報告書 3

**周世人相遺跡発掘調査報告書**

昭和59年3月31日

編集 赤穂埋蔵文化財調査会

発行 赤穂市教育委員会  
〒678-02 赤穂市加里屋81番地

印刷 赤 穂 孔 版

本データは全国遺跡報告総覧において公開するため、  
赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係が編集・作成したものです。

データ編集・作成 赤穂市教育委員会 生涯学習課 文化財係  
〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋 81 番地  
TEL : 0791-43-6962 FAX : 0791-43-6895

---

令和元年（2019年）10月1日 データ編集・作成